

治療法などの集学的治療に努めたい。

9) 胆嚢管原発と思われる胆嚢癌の臨床的・病理学的特徴

福田 喜一・吉田 奎介
川口 英弘・土屋 嘉昭
白井 良夫・篠川 主
内田 克之・武藤 輝一 (新潟大学第一外科)

胆嚢管癌は、男性に多く、結石合併率が低いことが特徴で、黄疸を主症状としたが発黄以前に腹痛などのエピソードが81.8%に認められた。画像診断上腫瘍描出は困難で、術前正診率は低率であった。胆道造影上全例胆嚢は造影されず、上・中部胆管癌と類似した胆管像を呈するため、PTCCD等により胆嚢管の形態を把握する必要がある。生存率も極めて低く、病理組織学的にも高度な浸潤傾向を示した。現時点では早期発見は困難であるが、無石胆嚢炎症例は胆嚢管癌を念頭に置き、炎症消退後も胆嚢管に疎通性がない場合は積極的に手術すべきである。また胆嚢管癌と考えられた場合は、PD+肝切除等の拡大手術が必要と思われた。

特別講演

I 胆道癌の画像診断と治療法の選択

千葉県がんセンター外科
竜 崇正先生

II 胆道疾患の内視鏡と治療

県立がんセンター新潟病院内科
小越和栄先生

第8回新潟胆道疾患研究会総会

日時 平成元年11月11日(土)
午後1時30分より
会場 有壬記念館

一般演題

1) 胆嚢癌に合併した胆嚢結石の検討

中平 啓子・青野 高志
小山俊太郎・坪野 俊広
加藤 英雄・山洞 典正
土屋 嘉昭・白井 良夫
塚田 一博・吉田 奎介
武藤 輝一 (新潟大学第一外科)

[目的] 新潟県における胆嚢結石と胆嚢癌の関連について検討した。[対象と方法] 県内の有石胆嚢癌の胆嚢結石66例を、比較的対照群(自験例胆嚢結石症385例)と共に肉眼形態及び赤外線分析から分類した。[結果] コレステロール系石が対照群の56.4%に比べ癌症例では72.7%と有意に高く、特に若年層で著明であった。一方、黒色石では対照群の28.3%に対し癌症例では10.6%と有意に低かった。病期分類と結石の種類、個数との関連は認められなかった。なお1969~88年のと当科における胆嚢結石症例中の癌合併率は3.27%、本学第1病理で検索された胆嚢癌症例における有石率は61.5%であった。[結語] 本県においても胆嚢癌に併存した胆嚢結石はコ系石が高率であった。

2) 逆行性胆管造影による肝内胆管同定の試み

阿部 実・柳沢 善計
秋山 修宏・植木 淳一
成澤林太郎・上村 朝輝
朝倉 均 (新潟大学第三内科)
富樫 満 (新潟労災病院内科)

肝内胆道同定率の向上は、肝内結石症例の診断や肝内腫瘍性病変に対する肝区域切除の際、胆嚢摘出時の胆嚢管と総肝管から分岐する右葉後区域枝との誤認の防止などに必要と考えられ、肝内胆管の立体構築を考慮した体位変換や斜位撮影にステレオ撮影を併用した。対象は、1987年6月から1988年10月までに、当科で施行した逆行性胆管造影304例の内十分な胆管の造影が得られた194例。その結果、1. 各肝内胆管枝の同定率は尾状葉枝を除き良好。2. 右葉後区域枝の分岐位置は、右肝管本幹が最も多く左肝管本幹、総肝管、右前枝上下分岐部より末梢部、左右肝管分岐部の順。3. ステレオ撮影と有効な体位変換、斜位撮影の併用は胆管走行の同定に有用と